

PROGRAM

山田耕筰：松島音頭

山田耕筰：来るか来るか

滝廉太郎：荒城の月

武満 徹：めぐり逢い

武満 徹：小さな空

J.レノン／P.マッカートニー（編曲／武満 徹）：

イエスタデイ ※ギター・ソロ

—— 休憩 ——

A.ルビーラ（編曲／志野文音）：愛のロマンス
※ギター・ソロ

E.モリコーネ／A.モリコーネ：愛のテーマ

P.トスティ：マレキアーレ

T.コットラウ：サンタ・ルチア

L.デンツァ：フニクリ・フニクラ

R.ファルヴォ：彼女に告げて

E.ディ・カプア／アルフレード・マズヅッキ：オ・ソレ・ミオ

PROGRAM NOTES

オペラ・キュレーター：井内 美香

カウンターテナーの美しい響きと、アコースティック・ギターの音色は相性が良い。今日のコンサートは前半に日本歌曲、後半にイタリア歌曲の名曲を集めてお贈りする。

山田耕筰(1886-1965)は日本で西洋音楽の受容に大きな役割を果たした作曲家・指揮者。歌曲から交響曲、オペラまで幅広い作品を書いた。歌曲では北原白秋の詩に曲をつけた「からたちの花」「この道」などがよく知られている。今日の1曲目「松島音頭」も白秋の詩によるもの。1928年に作られた〈新歌謡〉で、日本三景の一つとして知られる松島の自然の美しさを歌う。祭りの太鼓や三味線を表したビートの効いた伴奏パートも聴きどころだ。2曲目の「来るか来るか」は、長唄の名曲「越後獅子」(1811)の歌詞と旋律を借用し山田耕筰が編曲したもの。長唄の「越後獅子」は歌舞伎の七変化舞踊の中のひとつであり、越後国(現在の新潟県)から出稼ぎに来る大道芸人の獅子舞を模した曲だ。

滝廉太郎(1879-1903)は、明治の西洋音楽最初期の作曲家。肺結核で23歳と10ヶ月で夭折した。「荒城の月」は東京音楽学校(現在の東京藝術大学)編『中学唱歌』に選ばれた一曲(1901)。土井晩翠(1871-1952)の七五調の詩に、無伴奏の歌の旋律だけの曲だが、後に山田耕筰が編曲した版が知られている。かつては華やかだった、荒れ果てた古城を切々と歌う。

続いて武満徹(1930-1996)の二つの歌をお聴きいただく。「めぐり逢い」は同名の映画(恩地日出夫監督、1968年)の主題歌として生まれた。武満はシンガーソングライターの荒木一郎が作

詞し、歌うという条件で作曲を引き受けた。今ではクラシックの演奏会でも取り上げられることが多い。「小さな空」は、TBSラジオの連続ドラマで、漫画原作の西部劇『ガン・キング』の主題歌として武満が作詞・作曲した(1962)。優しい曲想で、広く親しまれている。

前半の最後はギター・ソロ。「イエスタデイ」(1965)はビートルズのポール・マッカートニー(1942-)作詞・作曲(クレジットはレノン&マッカートニー)。武満徹が編曲した「ギターのための12の歌」(1977)に収められている。原曲の雰囲気をよく伝えるアレンジだ。

コンサートの後半もギター・ソロから始まる。映画『禁じられた遊び』(1952)で広く知られるようになった「愛のロマンス」だ。19世紀スペインのギターの名手、アントニオ・ルビーラの作。物悲しいメロディーがマイナー・コードのアルペジオに乗って始まるが、後半は明るい曲想となる。志野文音自身の編曲による演奏でお楽しみいただく。

「愛のテーマ」は、G・トルナトーレ監督の映画『ニュー・シネマ・パラダイス』(1988)に使われている「愛のテーマ」に歌詞をつけたもの。「たった一日でも、君が僕の瞳の中にいられたら…」と歌う。この映画の音楽は巨匠エンニオ・モリコーネ(1928-2020)によるが、この曲のみモリコーネの息子アンドレア(1964-)がメロディを作曲し、エンニオはオーケストレーションを担当している。

ここからはナポリのカンツォーネを代表する傑作ばかり。「マレキアーレ」はフランチェスコ・パオロ・トスティ(1846-1916)の曲(1886)。サルヴァトーレ・ディ・ジャコモ(1860-1934)の詩による。ナポリ近郊の海岸の町マレキアーレに住むカルリ(カ

ロリーナ)への愛を語る歌だ。「マレキアーレに月が昇ると魚でさえも恋に落ちる」と情熱的に歌う。

「サンタ・ルチア」はナポリ生まれの作曲家テオドーロ・コットラウ(1827-1879)の作曲。歌詞はもともとナポリ方言で書かれていたが、1850年にエンリコ・コソヴィッチ(1822-1911)が標準イタリア語で新たに歌詞を書いたおかげで、世界的大ヒット曲となった。ナポリ湾のサンタ・ルチアでは「海の上では銀の月が輝き、波は穏やかで風は順風。さあ、私の小舟において」と誘う。

「フニクリ・フニクラ」は、ロンドンの旅行会社がヴェスヴィオ火山への新しい登山電車(フニコラーレ)を開発したがナポリ市民に不評だったため発注したコマーシャル・ソング(1880)。歌詞はペッピーノ・トゥルコ(1846-1903)、作曲はルイー・ジ・デンツァ(1846-1922)。曲の冒頭からリズムカルで楽しい雰囲気にあふれ、宣伝歌としての成功だけでなく、世界で長く愛唱されるにふさわしい名曲。

「彼女に告げて」(1930)はナポリ出身の二人、エンツォ・フスコ(1899-1951)の歌詞にロドルフォ・ファルヴォ(1873-1937)の作曲。「あなたの女友達に伝えてください、僕が寝ても覚めても、彼女のことだけを思っていると」と始まるが、曲の後半で、実は彼が愛しているのは語りかけている相手の女性自身だと分かる。切ない思いを歌い上げる、ナポリのカンツォーネの極め付けだ。

最後の曲は「オ・ソレ・ミオ」。作詞はジョヴァンニ・カプッロ(1859-1920)、作曲はE・ディ・カプア(1865-1917)とアルフレード・マズヅッキ(1878-1972)。カルーソーから、パヴァロッティ、ドミンゴ、カレーラスの“三大テノール”まで、名歌手たちの録音は枚挙にいとまがない。のびやかなリズムに乗って「君こそが僕の太陽」と愛を歌う。